

『原初の魔神』 リリ
カルマジカル頑張って
みる

ドリーム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『原初の魔神』は魔砲少女誕生の地で目覚める。その身にある武器は破壊の力。平和なこの世界では決して使わないと彼は心に誓う。

しかし：世界は残酷だ。自らの欲望のために他者を巻き込む悪人を見て、魔神は、その力を解き放つ。

たとえどんなに小さな叫びだろうと：彼は決して見捨てない。

マジンガー魔法世界にて古代遺産をめぐる少女たちの戦いに参戦する!!

といつても中身はただの高校生だったり…
な　　ん　　だ　　と　　思　　う　　？

目次

プロローグ（というか予告みたい）

1

マジンガー！海鳴市に出現！！

5

マジンガー！それは後の町のシンボル！！

17

マジンガー！そこにある幸せを救う！！

28

マジンガー！過去の因縁を断て！！

52

マジンガー！魔神の暴走！！

72

マジンガー！脅威から少女を守れ！！

89

マジンガー！脅威の魔力エネルギー！！

99

マジンガー！時空管理局乱入！！

108

マジンガー！空の決戦！！

121

マジンガー！次なる領域へ！！

136

「ジュエルシードを…渡してくださいッ!!」

(そんな柔い刃で…俺の乙が傷つくと思つたアアアアア!!)

その鋼の器は、あらゆる攻撃に耐えうる。

「目障りな木偶人形ね…消えなさいッ!!」

(そうか…ならあんたがそんな木偶人形に押し負ける現実を見せてやる…)

女の大魔導師、プレシアの魔力が宮殿を満たしていく。

——しかし同時に比例して、プレシアの前に立ち上がる魔神の瞳が、激しく輝き出す!!

「落ちなさいッ!!人形!!」

放射されるプレシアの魔力雷撃、並の存在なら跡形もなく消し飛ばせそうなその威力を…

(受ける病体女あ…これがマジンガーの光…明日を照らす光子の光だッ!!)

光子力ツビイイイイイウムツツツ!!)

魔神の光はそれすら突き抜け、宮殿を光で満たす。

あらゆる攻撃に耐えるボディ。超合金乙。

突進力とその強固な拳による凄まじい破壊力。ロケットパンチ。

3万度もの熱量を持つ光線を胸の赤い熱板から照射する。ブレストファイヤー。

ジャパニウム鉱石より発見された未知のエネルギー。光子力。

それを源に動く光子力エンジン。

瞳から発射し、あらゆるものを破壊する。光子力ビーム。

これだけではない。

ルストハリケーン。冷凍ビーム。アイアンカッター。ミサイル。フィンガーマシ
ル。光子力バリア。ジェットスクランダー。サザンクロスナイフ。

そして…内側に眠り続ける皇帝の力。

これこそ、神にも悪魔にもなれるスーパーロボット…その名も…

—————

「防衛プログラムが…攻撃をやめ…た？」

「！生きてた…生きてんだよフェイトちゃん…!!あの人は生きてたよ!!」

「あれは…!!」

（立て…立て…立てッ!!）

それは海底からその大きな体を持ち上げる。

うに別の敵が現れZを捕獲する。

それは刃の腕でマジンガーの腕を、胴体を羽交い締めにする。

油断と、あまりのパワーに、マジンガーの体からシミシシとした嫌な音が聞こえ始める。

(このお!!芋虫野郎ツ!!ハツ!!?)

しかし敵はそれだけではない。Zが空中へ目を向けるとそこには、空を埋め尽くすほどの敵影が存在していた。

虫の叫びのような悪寒のする叫びとともに、

(なっっ!しまったあ!!)

——敵は一斉にマジンガーに襲いかかる。捕縛され、身動きの取れなかったマジンガーは、そのいくつもの攻撃を受けてしまう。

——バキバキ…バキバキバキツツ!!!

(ツ?!?!?)

胸の熱板は剥がれ、腕を切り裂かれ、足には槍を突きつけられており、更に身動きが取れなくなるマジンガーZ。

連戦による消耗により、超合金Zは金属疲労を起こしていたのだ。

(クソお!!動け…動けZ!!光子力ビィがああッ!!!)

な…もう休んでもいいんじゃない？

ま、待ってくれ…!!あんたは!?あんたは一体誰なんだ!!?なんで…

——わしも神々と同じ人間を玩具のように遊ぶ屑じゃよ…

さらばだ。名を奪われた少年…マジンガー乙原初魔神よ…

俺は…俺は…ツ!!!

ー《Z》ー

(ん…ん…ん…は…)

彼…マジンガー乙が目覚めた場所は、森だった。いや、正確にいうと、山のふもとだった。
た。

朝のようで木々の間から刺す朝日が眩しい。

なんとか動こうとするもの、その体は以前の戦闘後と変わらず、見るも絶えない痛々しい姿のままだった。

腕はなく、体全体に亀裂が走っており、顔も表面が剥がれ、弱々しくライトを照らしていた。

（く、俺は……どこに飛ばされたんだ？……指一本動かないなんて……）

しかし……唯一良かったことは、あんな無理をしても、Zのエネルギーである光子力を動かす光子力エンジンには傷一つついてないということである。

Zはそれに安堵しつつ、これからのことを考え始める。

（なんとか、この体を直さなくては……もし次敵が来た時対処できないぞ……）

そんな時、マジンガーの視界に何か小さいものが映る。

それは少女だった。

地元のものだろうか……向こうからしたら謎の機械がこんなところに転がってるなんて通報ものだ……

マジンガーはそう考え、なんとか逃げようとするが、やはり全く体が動かず、せいぜい、瞳の光子力ライトを点滅させる程度にしか動かなかった。

「……一人ぼっちで捨てられてる……なのはと一緒だね」

なのは……そう名乗った少女はマジンガーの鼻先に触れる。

(おかしいぞ…故障か?少女が大きく…いや違う…マジンガーが小さくなっていいのか!!?)

なぜ倒れているとはいえ、山一つもあるであろう巨体を持つマジンガーZの顔に、少女が触れられたか…

それはマジンガー自身が縮んでいたからだ。

せいぜい大人の男一人と子供一人足したような身長しかなかった。

(なんてこった…こんなボロボロでどこだかわからないところに飛ばされた上に…体が縮んでいるなんて…)

マジンガー(の中の人)が頭を抱えていると、少女はされに接近し、マジンガーの胸の熱板を撫でてくる。

その時!

(ん?なんだ!?女の子から…光子力じゃない…ナニカが流れ込んで…ッ!!?)

マジンガーは突如体を発光し始める。それに驚き、少女はマジンガーZの前で尻餅をついてしまう。

「ど、どうしたの!?!」

(こ、これは…!!!)

光はやみ、少女はマジンガーZに目を向ける、そこにはなんと全く無傷のマジンガーZが、彼女を見下ろしていた!!

『アリガトウ』

マジンガーZの顔付近の空中に光子の光が集まり、そんな文字を形取っていく。

「わ、私、何もしていない……」

『ソレデモ……アリガトウ』

マジンガーZは山の木々の奥に消えていく。

—《Z》—

少女、高町なのはは、一人だった。

別に孤児だとか、家族が他界しているというわけではない。

ただ：一人だった。

なのはの父、高町士郎が大怪我を負った。高町家は翠屋という喫茶店を営んでおり、まさに今現在、経営が波に乗っており、店主不在のこの状況でも休むわけにはいかなかった。

(ダカラ我慢しなきゃ：お母さんにも：お兄ちゃんにも：お姉ちゃんにも：迷惑かけちゃ：ダメ：いい子でいなきゃ：)

これがまだ幼いなのはにできる唯一の家族への行動だった。

友達なんていないのに外に出て、遊んだように見せる。

心配も、迷惑もかけない。

いい子でいる。

もはや脅迫概念といっても過言ではない。

誰も悪くない。誰も悪くないのだ。

——誰もこの家族を思う少女のことを：咎められるだろうか？

そこへ寄り付いたのはたまたまだった。

今日は何して時間を潰そう…なんて考えながら歩いてきたのは…

——ギギ…ギギギギ…

「…誰？」

奇妙な…金属の擦れる音が聞こえる。

なにはそれが、なぜか声に聞こえた。今まさに何かに抗っているような…荒ぶる声に。

「まってて…！」

なにはは無我夢中で走り出した。何度も息切れを起こしながら、川を越え、岩を越え、『ギギ…ギギギギ…ガガガガガガガ…ゼエ…ツトオ…』

(ひどい…何でこんなに傷ついて…)

一体の魔神が見えた。

弱々しい光は、それでも動こうと、自身の体を省みないと訴えている。

なのははその光の強さに惹かれていった…

「ひとりぼっち…なのはと一緒だね」

(でもなのはとは違うね…だってどんなに辛くても…)

—どうしてそんな強いのか?どうして諦めないのか?なのはに教えて?どうしてなの?
?

答えるはずのないとわかっていても、心で問い続ける。自分と同じなのに、自分と違う存在に。

なのはが魔神に体を寄せた…その時。

—《魔神再起動》—

悲しげな目を持った少女、なのはは、その背中を見ながら、

(私…誰かの役に…いい子でいれたんだ…)

それはすべての始まり。

魔神と少女たちがおりなす、戦いの物語。

魔神の起動はすでにされている

マジンガー!それは後の町のシンボル!!

ズンツズンツズンツズンツ：

森の中を重苦しい音で突き進むマジンガーZ。

少女と出会ったことで、傷も完璧に修復され、森の木々の隙間から刺さる太陽の光で、その超合金の体に反射され、神々しささえ感じさせる。

しかし：実際マジンガー自身の心情は複雑なものであった。

（体が修復したのは良かったが：あの女の子から流れてきたエネルギー：不思議だ：この世界ではどの人間にもあるエネルギーなのだろうか：いや、その前にここは一体どこなんだ？あの女の子がいるということはこの近くに町が：この格好で町に入っているのか：？）

そんな考えが彼の中で蠢く。変わらない超合金の顔の中で、彼の本当の顔はどれほどの困惑な顔なのか：

しばらく動いていると、彼の目の前から木々が消え、人々の文明。町灯りが見えてきた。

(出れた……ここが……)

マジンガーの中で、なにかが溶けていく……

—————

どこかの町へ

『助けてくれエツ!! 奴らが壁を超えて……』

『まだか!!? まだ乙はこないのか!!?』

『や、やめてくれ……家は……家だけは……』

『いたいよお……助けてよお……あああああうううぐうううううう……』

——— 響く人々の悲鳴。助けを乞う人々の叫び。

(決して見捨てない)

まだ彼が人の名を捨て、魔神になったばかりの頃。感情を失った彼には、これだけが使命だった。

やってくる敵を、あらゆる手段と武器を持って破壊する。

泣き叫ぶ人々を、あらゆる手段と武器を持って救い出す。

たとえこの身が腐ろうと、溶けおちようと、砕けようとも、彼はマジンガー。

『最強のスーパーロボット』『原初の魔神』

——マジンガーZなのだから。

だからこそだろう。いくつもの戦いを乗り越え、それでも救えなかった彼に残されたのはあの最期の荒野だった。

それ故に、あの町、海鳴市の輝きが…彼には光子力よりも眩しかった。

（——懐かしい。あれはまだ人間だった…）

もう彼には人間だった記憶はない。それでも彼は自信の中にある人間としての魂はあるのだ。

町の光が、その魂を刺激する。

スーパーロボットは泣けない。

（しかし…どうしたものか…）

マジンガーZは見た目どおり、大きさなど含めとても目立つ。いくら人間に近いサイ

ズになっただろうと軽く3mはあるだろう。

そんなロボットが平然と町を歩くわけにはいかない。

(行動するとしたら…夜か…あと数時間と言ったところ…!!?)

行動時間を決め、しばらくは森に潜もりとしようとした瞬間、

ゴオオオオオオオオオオオツツツツツツツ

!!!!!!

(も、燃えている!!?)

夕焼けが海に沈んでいく。町を歩くさまざまな人が、足を止めた。

ある一軒家が燃えていたのだ。

炎は勢いを増していき、薄暗くなっていった町を紅く照らしていく。

「火事だ!!」

「燃えてるぞ!!」

「すげえ!」

「おい!だれか消防車呼べ!!」

野次馬が集まっていく。それに合わせて炎は更に強くなり、消防車がきた時にはすでに手に負えないような状況だった。

(助けなければ…)

誰もが中にいる人々を諦めたその時、

(誰もやらないなら…俺が…俺がやるッ!!)

魔神は動き出す!!

——マジイイイインツツゴオオオオオオオオオオウウツツツ!!!)

掛け声に合わせて、マジンガーZの瞳が輝く。両腕を掲げ、足を地面に突き立てる!!

そのまま凄まじい大ジャンプで町までひとつ飛びで飛んでいく。

ズゴオオオンツツ!!

誰もが隕石でも降ってきたかのようなその音に驚いただろう。

なんだなんだ今度はなんだ、と人々が音の方向に目を向ける。

そこには一体の魔神。マジンガーZがいた!!

(こんなところでは武装は使えない!中の人々が燃える前に救い出すしかない!!)

マジンガーは消防の放水邪魔にならないように中へ侵入する。

中の燃える家具、発生する二酸化炭素。しかしそんなもの、超合金Zの彼の前では無力。どンドン潜っていき、リビングらしきところにたどり着く。

「う…うう…」

(子供!!)

大きな棚の下敷きなつてしまい身動きが取れない少年を彼は発見した。すぐさま家具をどかし、少年を抱えようとするが、

(…この体では熱くて掴めない)

金属は熱伝導がすごい。それは超合金も例外ではなく、今のマジンガーの表面は、凄まじく熱いのだ。

(くっ…あ)

放水。あれに当たれば手だけでも表面温度を下げられる。

そう思いついたマジンガーはすぐさま周りを消化している放水に手を突っ込む。

「な…なんだあ?!? デケエ腕が」

何か消防士が言ってるようだが、マジンガーはそれを無視。少年を腕に抱え、家から出ようとするが…

「ろ、ロボット?」

(じつとしてろよ。今たすけ)

「い、妹が…いるんだ…」

魔神は窓を突き破り、その際目の目にいた…この家の持ち主だろうか、涙で顔をグシャグシャにした男性に少年を渡す。

「うあ…!!…だ、たけるツ!!生きてた…生きてた…」

「たけるツ!!ああ…」

「お母さん…お父さん…マキがまだ…」

「そ、そんな…」

マジンガーは少年を渡すとすぐさま再び家に飛び込む…

「ロボット…さん…マキを…」

(…)

それは幻覚だろうか…

そう少年は、見ていた人々は思っただろう。無言の彼の背中に光が集まり…

『マカセロ』

そんな言葉を形作っていた。

隅々まで探していく。家具を押し壊し、ドアをけやぶり、崩れたところは瓦礫をかき分ける。

(いた…!!)

奥に少女いるのを確認する。しかし…小さいその少女では壊れたドアを開けられな

(意図せず、Zを認知してもらえたのは嬉しいが…人々に受け入れてもらえるだろうか…)

内心不安でいっぱいだったマジンガーだったが、そんな思いを覆す声が聞こえ始めた。

パチパチパチ…

それは拍手だった。歓声だった。マジンガーZを褒め称える人々の声だった。

いつだったか否定された事があった。

いつだったか拒絶された事があった。

いつだったか…必要とされない事があった。

こんな光景は…荒野なんかでは見れない輝きだった。

(ああ…なんて…いい事だろう)

マジンガーZは、一躍有名となった。

—————

マジンガーは走る。なぜなら目の前の男を追いかけているからだ。

なぜ追いかけるのか…それは…

「ひつたくりよお!!だれか捕まえてえ!!」

「あのババア!! ロボットに頼むのは卑怯だろおおお……ああ降参! 降参するから追いかけてこないでくれエエエ!!」

ひったくりを追いかけていたのだ。

……なんとも言えないこんな状況だが、戦いに明け暮れることよりもこの環境は彼は彼なりに幸せだった。

(戦いが起こらないということは、だれも死なずに済む。俺はそういう世界にいるってことだ……それはなんていいことだろう)

戦い、勝つために生み出された彼にとって、戦いのない世界とはお役御免といっても過言ではなかった。

それでも、誰かが傷つくことない世界は、彼の望んだ世界だ。不満に思うことはない。——なのでこのように少し手を貸す程度がちょうどいいのだ。

「おお! 今度はひったくりか! 今回も協力感謝するよ」
(ああ。お勤めご苦労さん)

交番の警官に習ってマジンガー自身も敬礼してみる(凄まじくシユールだが)ひったくり犯を交番に届けた後、そのまま彼は街へ駆けていった。

ある時はエンストした車ごと人を運んだり、

ある時は落石した岩を退けたり、

ある時は海で溺れた人々を助けたり、
ある時は子供達を肩に乗せて走り回って見たり、
ボランテイアもいいところ、人々の陰にひっそり生きていた。

そんな彼は誓ったことがある。

——魔神は自らの武器を封印した。

(平和な世界に、魔神の力は必要ない…)

—《Z》—

〈数時間前〉

この海鳴市に魔神が降り立ってから数年が経過した。

町人はすっかりマジンガーZがいる生活に慣れてしまっていた。

ちよつと前までは市長や住人にマスコミの取材、海外からのマジンガー目的の観光でいっぱいだったのに、世界はすっかりそんな事を過去のことにし、いつもと変わらぬ生活を送り続けていた。

といつても当の本ロボットが実際、ふつうに車や人に混じって町を歩いているのだから、それはもう異質である。

「こんにちはロボットさん!」

「おはようロボットくん。今日もピッカピカだねえ…」

「お!ちよつといいとこに来た!ちよつとこのトラックうまく車庫に入んねえだ。ちよつと手伝ってくれ!」

「おーい！ロボット！また学校終わったら乗せてくれよ!!」

「あ！ずるーい！私も!!」

(平和だな…素晴らしい)

そんな人々の営みの暖かさに、今日もマジンガーは人助け兼散歩に繰り出す。

…元の持ち主が見たら苦笑いしそうだなと思ったのは内緒である。

ー《Z》ー

夕日が沈もうとする時間。学生が帰宅しようとしたり、社会人が後もう一踏ん張り！と頑張ってるだろう時間だ。

そんな時、マジンガーZは海岸の砂浜でゴミをチマチマ拾っていた。人がやるなら微笑ましいとか、なんとというかそんな光景が広がっているだろうが…

(…うん。空き缶だらけだな…猫缶…猫缶？なぜここに猫缶が…)

スーパードロペットがやるとあら不思議。凄まじくシユールな絵図が出来上がり、これはもし海へ散歩に来ていた人々がいたら苦笑いを浮かべてしまうだろう。

(すっかり綺麗になった。ここにいたら錆びてしまいそうだ。早く戻ろう)

そのまま道路まで駆け出し、車の心配がないことを確認する。もし車がマジンガーに衝突でもしてしまつたら、マジンガーじゃなくて逆に車の方が大破してしまう。

そしてマジンガーには一切傷がないという…

それでは車の運転手があまりにも不憫だ。

(左右問題なし。よし、このまま町を一周するとしよう)

この時のマジンガーはこの判断が、二人の少女の安否を揺らすもだとは…

まだ、知らなかった。

—《Z》—

夜も寒くなるこの時間帯。マジンガーは町を一周し、満足したので最近の定位置に戻ろうとしようとしたその時。

「ちよーはな…」

「アリサちゃっむー!!?」

曲がり角を曲がろうとした瞬間、そんな声が聞こえてくる。

そちらに顔を向けると、男が数人で二人の少女を羽交い締めにし、車で連れさつてしまった。

すぐさま、追いかけてやうとするが、ここでマジンガーの頭に一つの考えが浮かぶ。

(もしこのまま追いかけたら車を誤つて破壊してしまうかもしれない…あんな狭い空間で事故でも起こつたらあの子達が間違ひなく死ぬ。それに人質として取られるならもつと広くて被害の出ないところがいい…よし、追跡しよう)

作戦を変更し、マジンガー乙は車が進んでいった道とは違う方の道を走る。

こんな目立つ見た目をしているのでせめて見えないところを走るしかない。

(こんな時…空でも飛べたらなあ…)

なんて愚痴を吐きつつ、突き進んでいく。車はやがて人の少ない道に入り、そのまま山の中へ消えていった。

マジンガーもすぐさま山に入る。光子力ライトを消し、できる限り物音を立てずに…やがて、木々が晴れ、一つの廃墟が見えてくる。

(…か…)

そして目を凝らすと、廃墟の中へ眠つた二人の少女が運びかれていった。

これで動ける。そう確信しようとするが、

(…なんだこの感覚…人じゃない…)

何かあの廃墟の中には、どこかマジンガーZと似たようなものがある…そんな感覚が彼の脳内に響く。

(用心した方が良さそうだ…)

裏手に回り、廃墟の壁の隙間から中を覗く。

そこには…

―《Z》―

廃墟の中には、黒いスーツを着た男たちでびっしりだった。

男たちの眼光はどこか虚ろで、見るものを不気味と思わせるには十分の絵図らである。

しかし…更に不気味なのが、その奥にいるメイド服を着た少女たちである。

「…」

「…」

「…」

「…」

こちらは、まだ黒服の男たちの方が人間と思われるほどの冷たい鉄のような雰囲気醸し出していた。

「…ん…」

「…」

その時、連れ去られ、身動きを封じられていた少女の一人が目を覚ました。

周りの状況を確認、先程まで自分に何があったのか思う出すには、少女、アリサ・バニングスには十分だった。

「す、すずか。すずか！起きて!!」

「ん…アリサ…ちゃん…？アリサちゃん！」

「よかった…起きて…」

肩を揺らされ、もう一人の少女、月村すずかも目を覚まし、こちらも先程まで自分に何が起きたのかをしつかりと思いつく。

そう、彼女らは像に言う、「誘拐」されたのだ。

「あ、アリサちゃん…」

「大丈夫すずか。塾の迎えに鮫島を呼んでたし、私たちがいないことに気づいて絶対探し出してくれるわ！」

「——へえ…自分がどんな状況にあるのか分かってるくせに…そんなに希望を持てるんだ? いいねえ…若さだなあ」

そこに、心から鳥肌が立つような、気味の悪い声が彼女らの方に響く。

それと同時にメイド服を着た少女たちはその人物の後ろに着き、頭を下げ始め、黒服たちは一斉にそちらに体を向ける。

まるで訓練された軍隊のようだ。

「あ、あなたは…」

「だ、誰よ! ずずか! あんた知ってるの?」

ずずかは震えた口で、その答えを言う。

「お、伯父様…」

「はあ!? あんたずずかの家の人!」

男は、ずずかに言われると、そのまま二人に元へ近づき、すごそこまで移動する。

「そう…本来であれば僕こそが月村家の現・当主だった。名前は月村…月村…」

男は人懐っこい笑みを浮かべながら自己紹介へ入ろうとするが…

次の瞬間、

「ナンダツケ?」

まるで色々大事なものを抜け落としていったかのような表情を浮かべ、虚ろな瞳でアリサにグッと顔を近づけた。

「ヒッ!?!」

「おいおい…そんな怖がらないでくれよお…なあずすかあ?」

「…嘘です…だって…だって伯父様は…もう…」

「死ンダハズツテ言ウノカイ?」

「———!!!」

伯父様…そう呼ばれた男は顔の表情をコロコロ変えながら、ついにはケタケタと笑い始める。

その行動は間違いなく狂人的であり、不快感を漂わせている…

アリサとすずかの二人は自身に迫る悪寒に体を震わせ、二人で詰め寄る。

それを見て愉快だったのか、どうかはわからないが、男は更に不気味な笑みを浮かべながら二人に話しかける。

「まああああつたくずすかは俺たちがどれだけ偉大な種族なのか分かってないなあアアアアアア?あ?くくく…」

「…ッ!?!やめて伯父様!!それだけは—!」

「す、すずか!?!どうしたの?」

偉大な種族。

その言葉を聞いた瞬間、すずかは一瞬アリサへ顔を向け、大声で何かを男に懇願する。男はそんなの御構い無しに、首を傾げながらアリサへ顔を向け語り出す。

「あれ?あれれ?あれれれれれ!!?もしかして?まさかまさかの!?!教えてなかったのかい?すずかアア?」

「お願い伯父様!!それだけは!それ…だえは…」

「ちよ!ちよつと!あんた!何言つてんのよ!?!」

「知らないならしようがない…教えてあげるよ…俺らの正体を…」

ニタニタと笑顔を貼り付けて、顔を再びガバツとアリスに近づける男。

アリサはゴクリとそれがただ事ではない。親友の何か大切なことだと直感で知る。

「イヤアアアツツツツツツ!!!」

「いいかい?アリサくん…僕たちは月村の人間は…」

「人の血を糧として生きる…『吸血鬼』なのさあ…」

—《Z》—

「『吸…血鬼』?」

「そう! 夜の一族とも言われる! 人類以上の存在として君臨する偉大なる少数種族さ!!」

「あ…ああ…そんな…」

「すずかには心の底から絶望した。自身の大切でやまない親友に、決して知られたくない事実を知られてしまった。」

人間と人外が仲良くして貰えるわけがない。

離れてく…親友が、アリサが自分から離れていく…

それは吸血鬼、夜の一族として生まれた優しい少女、月村すずかの心の嘆きだった。

———しかし…

「ふ、フーン…それで?」

「…君…話聞いてたかい? 僕らは吸血鬼。君らの上に立つ存在で、もっとも恐るべく」そ

「!!?」

「嬉しいなあ…嬉しいなあ…すずかにこんないい親友がいたなんてなあ…俺は感激だよ…」

「でもお…悲しい…俺は悲しいなあ…」

「ここで君らは死ぬンダカラ」

その狂った瞳は、二人の命を捕らえていた。

—《Z》—

黒服たちは手に持つ銃を一斉に二人、正確に言えばアリサに向けて居た。

無論指示を出したにはあの男。

「や、やめておじさま!!アリサちゃんは…」

「すずか…君には君のお姉さん忍にに当主を降りてもらおう材料になるからまだ生かしといてあげるよ

…でも、君だけ幸せなんて味わって…許せない。許せない…ユルセナイネエ?」

男の目は、しつかりアリサを捉えて居た。

まるで、何か大切なものを見るような目で。

妬むような瞳で。

「ダカラ壊ソウ。君アリサノ幸セヲ。君ノ宝日常ヲ。君モコツチへ来ヨウヨ。スズカモ俺ト同ジ

コツチ側ナンダカラ」

「おじ…さま…やめて…お願い…私はどうしてもいいから…アリサちゃんだけは…」

「……うう…すず…か…」

銃口は依然とアリサへ向けられている。

男の瞳は狂いに狂った。もはやアリサもすずかも何も写していない。

(ただ…その幸せが欲しい…)

「アア！ダカラ殺スノサツ！！」

（欲しい）

「欲シイッ！！」

（ずるい）

「ズルイッ！！」

（僕にも…）

「俺にもツツ！！」

男は手をあげる。

間違いない。射撃の合図だ。

「殺セ！（くれ）」

（欲しい「殺セ！」）

「だれか…だれか…」

すずかの頬に涙が流れ、

「お願い…私の親友を…」

アリサはすずかを突き飛ばす！！

「!!? アリサちゃッ」

巨大魔神見参
!!!!!!

「《魔神出現》」

「……噂ノロボツトカ…殺レ！イレイイイイインツツツ！！」

男の掛け声と共に黒服たちの一斉掃射、それを掻い潜り、ありえない速度でマシンガンに接近する少女。

——しかし、

魔神は質量をもともせず、後ろの二人の少女を守るため、その巨大な体で前に出る

!!

「……………ツツ！！！！」

(うおおおおおおおッ!!!)

銃弾がいくつも当たるが、全くもって手応えを感じさせない。魔神の器は…決してただの鉄ではない。超合金Zなのだ。

イレイン。

そう呼ばれている自動人形は片手に剣を持ち、それをマシンガンにたたきつけようとする。

その間にも剣は強化超合金Zのガラスを突き破り、内部へ侵入してくる。
マジンガー自身にとって、それは脳の破壊につながる。

(た…立て…マジンガーZ…守るんだ…あの子たちを…幸せの証を…)
意識が薄れ始めていく。銃撃の音も、日々に入るガラスの音も…
やがて全てが暗くなる…

その時

「ロボットさん!!」

「私たちのことは気にしないで!!」

「戦って!!」

「私たちを…」

「助けてっつ!!!」

その瞬間、瞳にふたたび光子力が灯る!!

(……………光子カビイイイイウムツツ!!!)

「……!?!」

イレインは一瞬早く後ろに飛ぶ。その隙間を光子カビームは過ぎていった。

しかし光子カビームはそのまま廃墟を両断してしまった。

「ナ…ナンダト!!!?」

男は驚愕な笑みを浮かべる。その隙にマジンガーは少女達の前にたち、その拳を突き出す。

(俺は…俺はあツツツ!!!今!!本当の意味で人間をやめ、魔神になるツ!!!この街を守る!!
魔神!マジンガーZとして!!)

くらえツツ!!!ロケット…パアアアアアンチツツツ!!!)

射出される巨大な腕は、イレインの腕を貫通し、そのままほかの自動人形を何体も貫き破壊する。

「すい……」

「これが……ロボットの本当の力……圧巻だわ……」

イレインは、片手だろうと退かず剣一本で向かってくるが

(アイアンカッターアアツ!!)

腕から射出される刃、アイアンカッターで受け止めてその腕を掴み、

(あああああああああああツツツツ!!!!)

ブツリツツ

なんとそのまま引きちぎってしまった。

腕をそこら辺に放り投げ、イレインを宙に持ち上げる。

「……!!!」

(ムダだ)

イレインは残った足で反撃するが、マジンガーは全くビクともしない。マジンガーはそのまま腹に直接拳を当て……

(ロケットオ……パアアアアアアアアンチツツツツ!!!)

ロケットパンチは油断していた自動人形を破壊していき、その個数も数体までに減っていた。

そこに更に…

(トドメだあ!!ルストハリケエエエンツツツツ!!!!)

巨大な竜巻によりなんとか生き残っていた自動人形さえも、塵となり消えていった…

「馬鹿ナ…ナンダ…ナンナンダオ前ハ…ツ?!」

男は困惑し、目の前の存在に恐怖する。自動人形は、男が、夜の一族が心血を注いで作り上げた存在だ。

それが目の前で無残にもどんどん破壊されていき、ついには最強の自動人形であるイレインでさえ破壊されてしまった。

光子の光が宙を舞う…

やがてそれは一つの文字を作りあげる。

『Z』と。

すると、男は急にぴたりと動きを止め、マジンガーの方へ顔を向ける。

その顔は、

「……………」

何もなかった。さつきまで冷や汗をダラダラ流し、口から大量に血を吐き出していた男とは思えない、何もなくなつた表情だった。

「m…」

(なに?)

ボソリと、男は何かをつぶやく。ゆらり、ゆらりと近づき、ついにはマジンガーの胴体にしがみつき始めた。

(な、なんだこの男…さつきからコロコロ変わりやがって…)

そんな距離だからだろう。今度はマジンガーにもハッキリと聞こえた。

『マジンガー…ぜつとお…!!』

!!(!!)!!

ドグオンツツツ!!!

マジンガーZはその巨大な拳を躊躇いなく男の顔面に叩きつけ、吹き飛ばした。しかし吹き飛ばしたマジンガーZ自身は驚愕に満ちていた。
なぜなら、

(なぜ…俺の名前を知っている?)

Zと、名乗りはしたが、『マジンガーZ』とは名乗ってはいない。

なぜ知っている? その答えにマジンガーZはすでにたどり着いていた。

あるのは大きな疑問だった。

男は少女との関係的に、どう考えてもこちらの世界の存在。

なのになぜ…奴らと関わりがあるのか?

そして、直感で、すずか達の会話からそれは理解できていた。

——『おじ様は…もう…』

吹き飛ばされ瓦礫の下敷きになった男。しかし、瓦礫を吹き飛ばし、グチャグチャになった顔を歪ませながら、男は叫び、マジンガーに向き合う。

「見ツケタゾオ!!! 神々の遺産!! マジンガーZオオオオオオオオオオ!!!」

(やっぱりテメエ!! あいつらの回し者かあッ!!)

男の正体。それは死んだはずかのおじの遺体を利用してやってきた、転生を娯楽とする神々の使い!!

マジンガーZを再び自身の管轄に連れ戻すために寄越した存在なのだ!!

男は、飛び上がり、マジンガーZの目の前で着地する。そしてその充血しきった真っ赤な瞳をマジンガー向け、問いかけ始めた。

「ナゼ我々カラ逃ゲル?アソコニハ、才前ノ望ム全テガアツタ筈ダア!!」

(戦うことが…人々を救えないことが!!俺の望みなわけねえええだろおおおおお
おおおおおツツ!!!!)

叫びとともにマジンガーはロケットパンチを放つ。

しかし!なんと男は…

「ガアアアアアアアアアアツツツ!!!」

ガシツガシツ!!!

ロケットパンチを受け止め、そのまま耐えきって見せた。

その時始めて冷静になれたマジンガーは、男の体にある異変に気付く。

破けた服から血が吹き出しており、その奥にある白い肌は、引きちぎれ、その隙間から鉄の骨が見える!!

そう、男は…

(サイボーグ?!?!?)

「コノ体ノ持チ主ノ一族ハ、機械ヘノ優レタ技術ヲ持ツテイタ：コノ男ガ死ンダ後！
神々ハソコヘ目ヲツケタ!!」

サイボーグとして体を復活させ、夜の一族としての強力な身体能力と再生力、そこにさらに自動人形の技術でのサイボーグにより、個体として最強の力を手に入れた：

その力を持って、マジンガーZをあゝ荒野に連れ戻すと：

「体ヲ手ニ入レタ礼ニ、元ノ体ノ持チ主ノ、『夜の一族の当主になる』トイウ野望ヲ果タ
ソウトシタガ：思ワヌ所デメグリ会エタゾ!!マジンガー!!」

(テメエ：そんなに俺を怒らせたのか：)

ロケットパンチを回収し、後ろに下がり、遠距離攻撃に入ろうとするが：

「サセルカツツ!!」

男：神々の使いはその手をガツと広げる。すると五本の指先から鋭利な刃が飛び出て、マジンガーの左の熱板を引きちぎり、足部分に大きな切り傷を入れてみせた。

超合金Zの体にこれほどのダメージを一瞬で与えるということは、間違いなく最強の自動人形である。

「イレイント一緒ニスルナア!!俺ハ奴ノ何倍モノ調整ト実験繰リ返シ生み出された自動人形ダア!!今更超合金Z程度!!ワケモ：ナイツツツ!!!」

——ないツツツ?!?!?)

そう言っていると敵はマジンガーの首を持ち上げ、凄まじい力で締め上げてくる。ミシミシと、ヒビが入り、マジンガーの動きも歪になっていく。

男は歪みきった顔でマジンガーを見つめる。

「ドウシタゼット!!モウチカラ尽キタノカツツツ?!?!」

(ぐうううううがあああああ……あああ……!!)

すでに先の戦闘で、イレインにパイルダーを半壊させられ、すでに限界が来ていたマジンガー。

体もじきに動かなくなり…

そして…

「Zさんツツ!!!」

「もうやめて!!」

—《Z》—

(がああ…こはあ…か、体が…)

すでに限界だった体を無理やり動かしていたマジンガーZ。足は大きく割れ、もはや立つこともままならない。

「Zさんツツ?!?!」

「死なないで!!」

二人少女は、満身創痕のマジンガーに駆け寄る。

砕けた瞳は少女達の無事を見届けると、少しずつその輝きを失っていった…

光子力エンジンの停止である。

「ロボットさん!?!ロボットさん!?!」

「すずか!すぐに家の人に連絡を…」

「待って…絶対…助け…!!」

——マジンガーZはそこで停止した。

月村忍は焦っていた。それは昨夜、信頼する月村家のメイド、ノエルとの会話である。
『最近、私達を嗅ぎまわってる奴らがいる?』

『はい。このままでは、すずかお嬢様にも被害が出る可能性が。それに…』

『わかつてるわ。私たちの秘密…よね?おそらくこれは私を当主から引きずり落とそうとする何者かの計画…ノエル。至急対処に当たって』

『畏まりました』

——まさかこんな早く行動に出るなんて…

忍の頭には最愛の妹、すずかの事でいっぱいだった。もしあの子になにかがあれば、忍は決してもう元の生活は送れないだろう。

知っていて対処が遅れた、当主としての不甲斐ない自分を恨む。

まだ幼いすずか。生かしてるとは思うが、彼女は幼いながら誰もが認めるとても可愛らしい容姿を持った少女だ。

人の倫理を持たない輩がいたとしたら…

「忍。あまり考えるな。今はすずかちゃんが無事な内に向かうことを考えるんだ」

「!!…ええ。ごめんなさい恭也…」

恋人で、ガードマンでもある高町恭也にいわれ冷静になり、そこから先を考えるのをやめた。

嫌な考えは消す。

今は何より急いで妹の居場所を掴むことだ。

「忍様。どうやらバニングス様の方も、アリサ様が帰ってらっしゃらないようです」

「今日、あの子達は塾だったわね…一緒に捕まってしまった可能性が高いわ…急ぎなさい!」

「はっ…すずかお嬢様の携帯から、位置情報はわかっております。じきに…あ、あれはツツ!!?」

「ノエル?…どうし…何ですって!?!」

目的地の廃墟への一本道、山へ入ろうとする忍の車から運転席のノエルは信じられないものを目にする。

ノエルにつられ、忍と恭也も外へ目を向ける。

その光景に、二人も目を奪われた。

(黒い…強烈な竜巻…!?)

山のおもと…そこから通常の自然界ではありえない竜巻が巻き起こっていた。

それは次第に小さくなり、消えていったが、その位置が、ちょうどすずかの携帯の位置情報が示す所と一致していたのだ。

「ノエル!!」

「はい!少々荒っぽくなるのは…」

「構わないわ!!飛ばして!!」

「畏まりました!!」

車は山道ではありえないスピードでふもとまで駆け上っていく。

ー《Z》ー

途中で、後ろからやってきたバニングス家の執事、鮫島とも合流し、忍達の乗る車はふもとに到着する。

すると同時に、忍の携帯に電話が届く。

相手はすずかだった。

「もしもし!!?すずか!!」

『お姉ちゃん!!』

「よかった…無事なのね…!」

安心し、力が抜ける忍、すぐさま助けに入ろうと思ったその時、忍はずすかの声が切羽詰まった物だと気付く。

『お姉ちゃん!早く来て!!このままだと…死んじゃう!!』

「!!?どうしたの!?怪我をしたの!!」

『ううん。私とアリサちゃんは大丈夫。でもこのままだと…』

『——ロボットさんが…私達を助けてくれたロボットさんが死んじゃうの!!!』

「ロボット…?…わかったわ!!すぐいくから、待つてなさい!ノエル!工具はある?」

「自動人形用のならば…」

「構わないわ!!恩人(人じゃないけど)を救いにいくわよ!!恭也!!力仕事よ!手を貸して

!!」

「わかった!!」

「私も手をお貸ししましょう。これでも機械には知識があります」
「ありがとう鮫島さん！」

忍達は自動人形用の特殊な工具を片手に、廃墟へ侵入する。
すると中には…

「お姉…ちゃん…」

「ちよつと!!起きなさいよ!!ちよつとツツ!!」

「これは…」

「なんて無残な…」

朽ちた魔神が佇んでいた。

―《Z》―

「損傷…激…直すには…」

どこからともなく声が聞こえる。

先程までの冷たい外の風はなく、暖かい室内の温度だ。

「ええ。それじゃあ後は…」

(直され…てる?)

視界は戻らないが、体の節々にあつたぎこちなさが消え、光子力エンジンの作動音が自身の体内で忙しく響いており、しっかりと動いているのがわかる。

(しかし…なんで視界だけ戻らないんだ?)

しかしいぜんと真つ暗な状態での放置。パイルダーが損傷してしまつたからだろうか。という考えに行き着いた時、あることにマジンガーは気がつく。

(パイルダー?パイルダーはそういえばセツトされているのか?)

そう、今のマジンガー本体には、司令塔であるパイルダーがついていなかったのだ。核となるエンジンが動いていても指令をだすパイルダーがなければ視界は全く戻らない。

そのことに気がつき、マジンガーはホツとすると同時に、鬱な気分侵されていた。

(パイルダー…中身は間違いなく見られるよなあ…)

マジンガーがそんな気分になる理由。それはパイルダーの中にあつた。

そもそも、マジンガーという概念になつた少年が、どうやってその体を動かしているのか?

それはパイルダーの中身に秘密があるのだ。

I 《Z》 I

月村忍は、マジンガーZの構造に圧倒されていた。

とてつもない強度のボディ。搭載されてる数多の装備。原理不明のエネルギーにそれを動かすエンジン。

一体どれほどの天才がこんなものを作り出せるのか。(実際天才ではあったが…) とりあえず、再現不能の超合金はともかく、内部の破損を一つ一つ修復していく。

しかしそれでも破損の状態はひどく、一晩で直せるものではなかった。

なので、忍は修理をノエル達ほかの人に任せ、すずか達の待つ部屋へ向かう。

「待たせたわね」

「あ！お姉ちゃん！ロボットさんは!?!」

「忍さん！どうなったんですか!?!」

「落ち着いてすずか、アリサちゃん。破損がひどいから一晩では直せないかもしれないわ。それに内部も装甲も私達にはオーバーテクノロジーすぎる…もしかしたらもう動かないかもしれない」

「そんな…」

「…とにかく、何があったのか…話してくれる?」

忍になだめられ、さすがとアリサはあの廃校で何があったのか、それを包み隠さず全て話した。

忍達はその話を一切疑いもせず聞届ける。

「それと…私達を誘拐した犯人…おじさまは…言ったことが本当なら、もう死んでるらしいの」

「!それはどういうこと?死人が蘇るなんて…いくら私達でも…」

「わからない…でもあの人はこう言ってたのお姉ちゃん。『連れ戻しに来たぞマジンガー』って…」

「マジンガー?」

「あのロボットの名前だと思う…見た目はおじさまだったけど…中身は違うとか…うう…」

「すずかお嬢様!!」

すずかはうずくまり、ガタガタと震えだした。ずっと気を張っていたのか、となりのアリサも同じく震えていた。

そのことにいち早く気づき、近寄るメイドのフェアリン。

すずかとアリサに毛布をかける。

「あ、ありがとうフアリン」

「ありがとうございます」

「いえいえ！そんなことより今日はお風呂に入ってもう休みましょう。ね！忍様！」

「ええそうね…でもその前に…アリサちゃん」

「え？」

忍はアリサと目線を合わせ、問いかけ始める。

「あなたは私たちの秘密を知ってしまった。そんなあなたには二つの選択権があるわ。

一つは『今まで、月村と関わって来た記憶を全て消して、赤の他人になること』

もう一つは『月村家、夜の一族の盟友として、これらの秘密を口外しないこと』

「後者で」

即答だった。グレートな勇者並みの即答だった。

アリサの赤い瞳に嘘はなく、その目は優しさに満ちていた。

手は自然とすずかとつなぎ、二人で忍を見つめる。

「…ありがとう…アリサちゃん。私達を…受け入れてくれて…すずかの友達でいてくれ

て…」

忍の心に陰りはなかった。

『ガガガガガガガガ…』

魔神の瞳が一人静かに輝き始めていた。

マジンガー！魔神の暴走！！

月村家、地下の格納庫。忍の代になるまで、ここで自動人形は生産されていた。しかし、忍の命令により、現在自動人形として働くメイド達が故障しても修理できるように残されているだけで、生産としての使われることはなくなつた。

マジンガーZはそこに安置されていた。足に固定具がつけられて、今も忙しくメイド達が修理に精を出していた。

「すごいわ…私達自動人形以上の精密さだわ…」

「ちよつと悔しいけど、やる気も出てくるわね!!」

「それにしてもまずかお嬢様とアリサお嬢様も可愛そう…まだあんな幼いの…」

「私たちは全力でサポートするだけよ。少しでも今回のことを忘れさせるためにね…」

「今日はこのあたりにしておきましょう」

雑談を交えつつ、それでも作業量を変えず精密作業をしていたが、すでに夜も遅く、明日の準備もあるため、メイド達は工具を持って撤退していき、格納庫の電気は消えていった。

『ガガガガガガガガ…』

その時、マジンガーの顔が軋み始めた。

ライトがつき、腕や足についた拘束具を無理やり引きちぎり始める。

『オオオオオオオオオオオオツツツツツツ!!』

そして…閉じた格納庫シエルターに!!
ワーにより、格納庫シエルターはあつという間に破壊されてしまった。

『……………』

魔神は突き進む。その体を歪に軋ませながら…

—《Z》—

『—————ツツツ!!
—————ツツツ!!
—————ツツツ!!』

月村家にサイレンが鳴り響く。

こんな機能があつたの!?!と驚くすずかやアリス以外に、忍は何が原因なのかすぐさま理解した。

フアリンも理解したのか、部屋の隅に置いてある固定電話であるところに電話する。
格納庫方面だ。

「こちらフアリン!!格納庫、どうしました!!?」

『…大変です!!突然…暴れ出して…』

「ど、どうしました!?!あ、忍様…」

「私よ。何があつたの?」

フアリンは忍に受話器を渡し、忍がすぐさま事情を聞き出す。

『ロ、ロボットが…格納庫のシエルターを突き破つて…出ていきました!!』

「なんですつて!?!」

その声は、その部屋にいる人物全員の耳に入る。そして…少しずつだが、聞こえてくる衝撃音。

——ゴゴゴゴゴ…ツツ!!!

魔神はまつすぐ上に向かっているのだ。

徐々に近づいてくる魔神の地響きに少女二人は体を揺らす。

「すぐに止めて!!」

『で、ですが…止まりまっせん!!』

それを機に、電話は途絶えてしまった。

忍は思考する。ロボットの存在は数年前の火災での活躍から耳にはしていた。

もしかしてほかの一族の回し者では?と警戒はしていたが、ここ数年、人助けボランティアまがいのことしか分からず、警戒を緩めていた。

そして今夜の事件、出会って数秒だが、あのロボットが人に害する存在ではないというのがわかる。

ジリリリリッツ!!

「!!。私よ。状況は?」

『はい!こちら地下3階!ロボットは以前と足を止めません…ただ…どうやら私達を認識していないのか、切りかかっても銃で撃つても反応しないっていうか、障害物は壊すけど、私達は完全に避けられてるっていうか…』

「つまり怪我人はいないのね?」

『はい!怪我人、もしくは破壊されたものはいません』

「…ねえ。聞きたいんだけど…ロボットの様子を教えてくれる?…こう…最初と何か違うっていうか…」

忍がそう聞くと、「少し待ってください」という声が聞こえ、しばらくは応戦中の音し

か聞こえなくなる。

しばらくして再び受話器から先ほどのメイドの声が聞こえる。

『忍様!!わかりました!!頭部です!頭部にあつた飛行艇の形をした白い部品がありません!!』

「回収し忘れた…?ファリン!!すぐにあの廃墟に行つて!!もし白い飛行艇の形をしたものがあつたらそれを持つてすぐに戻つてきて!!」

「は、はい!!」

ファリンはトコトコ小走りで走つていく。

「全員!!地下を閉めるわ!!動けるものはすぐに上に移動して!!動けないものは逆に地下の格納庫に!!急いで!!」

『畏まりました!!』

ー《Z》ー

パイルダー損失という事実気づいた忍の命令で、ファリンは不慣れな車をかっ飛ばしていた。

途中何回か事故にあいそうだったが、無自覚な彼女の可憐さで色々見逃されたりしたが、そこは別の話。

今は廃墟に到着した彼女の話だ。

「白い…白いもの…白くてでかいの…あ!!」

ファリンが懐中電灯で照らしながら探すと、瓦礫の下に、ひび割れたパイルダーが放置されていた。

「いつ外れたんだろう…? まあいいや! 早く行かないと…え?」

ファリンがパイルダーを掴み、持っついていこうと思ったその時、表面のガラスが少し割れ、その中身を見てしまった…

「嘘…なんで…?」

ファリンがその場に立ち尽くしてしまう理由がその中であつた。

「——な…なんで…人の脳が…」

人の頭蓋骨に守られるはずの脳が、直接パイルダーに飲み込まれていた。さまざまに機械でできた管が脳に突き刺さり、まるでパイルダーそのものが脳といつてもいいほど

…

「と、とにかく…戻らないと…」

その時、

『…少女ヨ…頼ミガアル』

「え!?こ、声!?!」

ファリンは慌てて周囲を見渡す。しかし人影がなく、というか、声は彼女の目に直接写っていた。

「光の…文字…?」

『私ヲ…友ノ…所へ…』

ー《Z》ー

マジンガーは停止していた。いや、より正確に言うなら上を見上げ、どう登るか思考していた。

『…ガガガガガガガ…』

(登レ…登ツテ殺セ…殺スノダ!マジンガー!!)

魔神の腕が動き出す。

「忍様!回収してきました」

「ありがとうファリン。どうやらさつきまでの音が嘘みたいにな、静かになってたわ。今のうちに対策を…」

「いえ、対策はわかりました忍様」

「ファリン?どう言うこと?」

「みてください。これがあのロボットの脳。パイルダーです」

そう言い、ファリンはパイルダーを忍に見えるように差し出す。それを忍は受け取る、ファリン言葉を理解する。

「…そう。これがロボットがひとりで行動していた理由ね。人そのものをロボットとしての組み上げたのがあの…マジンガーZってこと…」

忍は冷静に、パイルダーに埋め込まれた脳を見ながらそう答える。

忍は冷めた目でパイルダーを見つめた。

なぜならマジンガーが元はひとりの人間だと言うことを間接的に理解したからだ。

— 《魔神降臨》 —

「ま、マジンガーZ!」

「まさか、通路を無視して直接こっちにやってくるなんて…鮫島さん!! すすか達を!!」

「お任せください!!こちらです!!」

「Z…なんで…」

「お、お姉ちゃん!!」

扉が閉められる。これでこの部屋にいるのは、忍、恭也、ファリン。

…そして…

『……………』

マジンガーZ!!!

「ファリン!!つまりそれをマジンガーの頭部に戻せばいいのね!!」

「は、はい」

飛ばされた腕…ロケットパンチがマジンガーの元へ戻る。

マジンガーはロケットパンチが左右どちらにも戻ると、その赤く光る瞳を、

モオオオオオオオオオオ…ヨコセエエエ!!!)

それはブレストファイヤーでも消せなかった、神々の契約でさえも消せなかった。あの男の、執念だった。

「…私達が恵まれてることは…認める。認めるわ。でもね…あんたは自分のために私の妹に手を出した!!あんたの気持ち関係なしに私はあんたが許せない!!」

忍は叫ぶ。家族を守れなかった自分への怒りか、家族を苦しめた男への怒りか。

あるいはその両方か。

どちらにせよ…

「———今だ!ファリン!!」

「たあああああツツツ!!」

『パイルダー…』

『オン!!!』

暴走しながら、彼の意識はマジンガーに届いていた。メイド達、人々を決して傷つけないようにと…

(いい加減成仏しろ…お前の居場所はまだ…)

(ヨコセエエエエエエエエエエエエエエエエ忍ウウウウウウウウウウウツツツツツ!!!!)

マジンガーZの瞳が輝き始め…

(もう…ここにはない…光子カビイイイイイイイイイイイツツツツツ!!!!)

一気に放出された。

ー《Z》ー

月村家、朝の様子は…

「Z! その材木はこっち!!」

「Z!次はこれを持って行ってくれない?」

「こつちだよZ!」

「次はここも!」

「こつちも!!」

「力仕事がいっぱいだよZ!!」

メイドに囲まれながら屋敷修理をするスーパーロボットがいた。

く昨夜く

「ええつと…マジンガーZ?」

呼びかけられ、マジンガーは首を縦に振るう。

忍は困惑していた。つい先ほどまで大暴れしていたものが今では急に大人しくなるのだから当然だろう。

「…これだけ聞きたいわ。あなたは…人類の敵?味方?」

『Zハ助ケヲ求メル者ノ味方デアル』

光子の光はこれほどにないというくらい輝いていた。

マジンガー!脅威から少女を守れ!!

(がああツツ!!)

ガシヤアアアツツ!!

凄まじい音を立てながらマジンガーは住宅街に突っ込んで行く。いや、正確に言うなら放り投げられたと言うべきか。

マジンガーは自身の足に絡みつく、触手と、その本体を睨みつける。

「ろ、ロボットさん!!」

(まだいたのか!早く逃げろって…ああ!!?)

別の触手が腕に絡みつきそのまま空中に体を持って行かれる。

そのまま急降下で地面に叩きつけられるマジンガー。

(ぐうう…こじや武器は…使え…ない…)

マジンガーにダメージは全くないが、このまま防戦一方だと間違いなくやられてしまう。

「!!ロボットさん!危ないっ!!」

(何!?ぐおおお!!!)

ジュエルシードを元に戻した…!!」

(…なんで動物が喋ってるんだ?)

勝手に人並みに動いているロボットに言われたくはないと思われる。

—《Z》—

それは月村家での事件後、改築を済ませて、月村家を旅立とうとしているマジンガーがいた。

するとそこに以前の事件の被害者、月村すずかが走ってくる。

「ろ、乙さん!!…本当に…本当にありがとうございました。あなたがいなかったら私やアリサちゃんはとっくに…」

しかしマジンガーはしやがみこみ、すずかをその巨大な腕で持ち上げると、そのまま自分の方に乗せ、海の方へ振り返る。

「…また…会えますか?」

マジンガーは頭を縦に振るう。

光の文字がすすかの目の前に集まり：

『君達ガ助ケヲ必要トスルナラ』

マジンガーはすすかを下ろし、そのまま走っていく。

再び誰かを救うため。

「ありがとう…マジンガーZ」

(結局巻き込んだのは俺なんだ。神々との因縁をここで断ててよかった…俺はこれでようやく自由になれた)

Ⅰ 《Z》 Ⅰ

そんな日の夜、再び彼女に出会った。いや、見かけてしまった。

怪物に襲われそうになっていた動物を抱えたまま走るなのはを。

(この世界にもあんな奴がいるとはな…)

「ありがとうロボットさん。助けてくれて」

「僕からも、ありがとうございます」

夜中に一人と一匹にお礼を言われるロボット一体。

実にシユールな光景だがそれもいつてられない。

そしてフェレット…ユーノ・スクライアは語り出す。

これから始まる物語…ジュエルシードを巡る戦いの物語を。

ジュエルシード…それはスクライア一族が発掘した古代遺産、『ロストロギア』の一つであり、全てで24個ある超魔力の結晶体。能力はなんと『願いを叶える』という破格のものだが、代償としてその願いが歪んだ方向に叶うという欠陥物の願望機だった。

スクライア一族はこの地球とは違う世界から来た、魔法という技術を使う人々であ

り、ユーノもその一人。

しかし、輸送中の事故で、ジュエルシードは地球のこの海鳴市にばらまかれ、このままでは危険と判断し、ユーノは一人で回収に当たっていたが、ジュエルシードの暴走、それを止めるための封印処置が落ちた衝撃で解けてしまい、先のような怪物体、思念体となりユーノでは太刀打ちできなかったところをなのはに拾われ、動物病院に届けられた。

そのあと、病院に思念体が一体現れ、魔力を持つ者にしか聞こえない『念波』という通話手段で、ジュエルシードを封印できる魔力資質のある人に呼びかけ、それに従いなのはが来た…それがユーノの話した経緯である。

(……次元世界。ロストロギア。ジュエルシード。魔法の資質。まさか科学一筋……と) いか科学そのものの俺がそんな物に対面する日が来るとは……)

マジンガーは困惑したが、事実見てしまったため、信じるしかなかった。

そもそも先日吸血一族とも会っているため、いまいち驚きもしなかった。

「私！手伝うよ！困ってるなら助けなきや！」

「あ、ありがとうなのは！」

なんて考えにふけっているマジンガーをよそにすでに二人の話は終わっていたようだ。

…こんな少女を戦いに巻き込むのもどうかと思うが、事実魔法を使える資質があるな
のはに頼むしかないのだろう。そう思ったマジンガーは、なのはとユーノを抱える。

「わっ…ロボットさん?」

『帰ッタ方ガイイ』

なのはすつかり今が夜中で、自分のような子供がぶらついていい時間ではないことに
気がつき、慌て始める。

そんななのはをよそにマジンガーは走り出す。

すでに住人の家全てを把握していたりするスーパーロボット。

Ⅰ 《Z》 Ⅰ

数日後、マジンガーはなのはとの再会、魔法との遭遇、この町に迫る脅威を経て、ジユ
エルシードの搜索に精を出していた。

未だ一個も見つからないが、町が危ない状況に、彼は止まっていられなかった。

やがて森に入り、搜索範囲をさらに広めようとすると、

「オオオオオオオオオオツツツツツ!!!」

狼のような姿をした怪物に遭遇する。

間違いなくジュエルシードだ。

マジンガーは戦闘態勢に入ろうとするが。

「!!!」

(は、速い!!?)

凄まじいスピードで、その鋭い爪を振りかざし切りかかって来る!!

とつさに腕でガードした。

しかし何というパワーだろうか、それともスピードか爪の鋭さ…もしくは魔法的な

かなのか、あの超合金乙に傷が入ったのだ!

(…長引いたらまずいな…ここは森だ。大きな技を使えば火事になる。

くらえ! ロケットパアアアアアアアアンチツツツツ!!!)

射出される二本の腕。

しかし案の定凄まじいスピードでかわし接近してくる。

案の定…である。

(そう来ると思ってたぜ!! ルストハリケエエエエエエエエツツツツツ!!!)

口から酸の竜巻を発生させ、敵のみを酸化させて破壊していく!!

体が徐々にバラバラになっていき、中から小さな子犬とジュエルシードが出てくる。

(なっ?!…ジュエルシードは生き物に取り付くのか!?聞いてないぞ!!)

あのままでは子犬ごと消しかねなかったと冷や汗(出ないけど)をかきつつ子犬を抱き上げる。

怪我はないようで眠っていた。

木陰に下ろし、今度はジュエルシードをつまみあげる。

(こんなちっこい宝石に世界一つ壊しかねない力が入っているのか…恐ろしい魔法つてのは)

なんてマジンガーは思うが、自身の中にあるもはや半永久的に動き続ける光子力エネルギーも似たようなものである…と指摘するもにはいなかった。

その時!

雷の槍がマジンガーに襲いかかる!!!

(ツツ!!!?、光子力ビィィィィウムツツツ!!!)

マジンガーはそれを光子力ビームで弾き返す。

「…ロボット…母さんのゴーレム見たい…」

(女の子……なんでレオタード？そういう子なのか？)

その時、魔神はもう一人の主人公と対峙をする。

槍が当たるときに直接脳にダメージが入っていく。

このままではマジンガー以前に彼がダメになってしまうだろう。

(クソツツこの森…さつきと様子が違うぞ…)

少女が現れるまで気がつかなかった。

全体的に森の雰囲気が変わっていたのだ。

閉鎖的な暗さと寒さの空間。

これは魔法世界では『結界』と呼ばれる空間魔法だった。

マジンガーはいつのまにか少女の檻に落ちていたのだ！

「止まって」

(こいつ…結構構わず魔法を放つてきやがるう!!…この空の感じ…まさか…)

マジンガーは空を見上げ、あることに気がつく。

それは昔の記憶。

マジンガーを開発した研究所が、敵から拠点を守るために張ったバリアがある。

それはマジンガーZにも搭載されている光子力バリアである。

もしかしたら今自分は魔法によるバリアで脱出を不可能にされているのだろうか。

(だが、タネがわかればこつちのものだ!!空に放つ!!突き抜けエエエ!!!光子力

ビイイイイウムツツツツ

!!!!

「バルディッシュユ」

フェイトの持つ魔導師の武器、『デバイス』。

デバイスは主の呼びかけに応え、姿を変形させる。

変形した先端の溝からバインドと同じ黄色の魔力を放出し、放出された魔力は空間で固定、刃に形を変え、一気に近距離態勢に入る。

鎌のようなモードとなった。

「ジュエルシードを…渡してッ!!」

デバイスを振り上げ、マジンガーの頭部に向かって振り落とそうとするフェイト。

——しかし

(そんな柔い刃で…俺の乙が傷つくと思ったアアアアア!!)

バリイインツツツ

!!!!!!

「!!?」

(アイアンカッターアアアアア!!)

なんとマジンガーはバインドを力技で破壊し、右腕のアイアンカッターを射出、その

ままバルディッシュの刃を受け止めたのだ!!

「クッツ…強い…」

そのまま弾き飛ばし、木にぶつける。

フェイトは自身を見下ろすマジンガーの瞳を睨みつける。

その時、

「フェイトー…ツツツ!!!」

空中から一人の女性が降りてきてフェイトに駆け寄る。

「あ、アルフ…」

「ふえ、フェイト！大丈夫かい？お前か！フェイトをこんな目に合わせたのは!!」

女性はフェイトを抱きながらマジンガーを凄まじい眼光で睨みつける。その様は凶暴な狼を連想させた。

「…う…」

「……」

(…)

沈黙が続く。双方出方を伺っているのだ。

次の瞬間、アルフと呼ばれた女性が飛びかかろうとしたその時…!!

「ロボットさん!!」

「倒しちゃダメえ!!」

!!!

—《Z》—

なのはは、以前友人のすずかの屋敷であったもう一人の魔導師のことがずっと気がかりだった。

(名前も聞けなかったなあ…)

なんて思いつつ、帰宅していると、

「!!?」

巨大な魔力を感じる。

ジュエルシードだ。

「レイジングハート!!」

『イエスマスター』

『デバイス、『レイジングハート』を取り出し、バリアジャケットを装着し、反応のあった場所へ急行する。』

しかし…

『マスター。ジュエルシードの反応がロストしました』

「え!? な、なんで?」

『おそらくもう一人の魔導師が原因かと』

「なら急ごう!! 今度こそ名前を聞くんだった!!」

なのはは、さらにスピードを上げていき、現場の森へ着陸する。
するとそこには、

「…う…」

「よくもフェイトを!!」

『……』

魔神が二人の前に立っていた。

—《Z》—

「ロボットさん…」

（君か…）

「あれがフェイトの言ってたもう一人の…？」

「あ、アルフ…気をつけて…あの子はまだ大したことない…けど…」

フェイトはなのはからマジンガーへ視線を移す。

「あのゴーレムは…強い…ジュエルシードで強くなった生き物が…一瞬でやられてた」

「く…そりや分が悪いね…逃げるよフェイト!!」

「あ、待って!!」

フェイトとアリフは瞬間的に消えた。

これも魔法の一つ、『転移』である。

「…行っちゃった…」

（…なぜジュエルシードを狙っていたんだ？ユーノの話ではジュエルシードは輸送中の

事故で地球にばら撒かれた。そのことを知っているのは当事者のユーノだけ…ジュエルシードの存在を知りようが…)

そこでマジンガーはあることに気がつく。

それは正解だった。

(いや待てよ? そもそも本当に事故なのか? ロストロギアなんて危険な存在を輸送する船がそう簡単に事故にあうものなのか? それだったら意図的に事故を起こした方が確率は…まさか…あの子が?)

マジンガーの頭の片隅に浮かぶこの事件の真相。

これは…

(仕組まれた出来事…だと言うのか?)

マジンガー！時空管理局乱入！！

——世界は滅んだ。

ありとあらゆる文明は破壊され、飲まれ、消えていった。

人が作り出した、

『偽りの魔神』の手によって——

—《Z》—

その時、海鳴市は巨大な樹木に覆われた。

樹はその根を徐々に伸ばしていき、空を覆い尽くす。

ビルは崩れ、大勢の怪我人が現れる。

はずだった。

——マジイイイイツツゴオオオオオオオオオオオオオオオオウツツツツ
!!!!!!

それは魔神がいなければの話である。

(どこからこんなに湧いて来やがった!!これもジュエルシードのせいか…こんなでかい
のまで生み出すなんて聞いてないぞお!!?)

下敷きになりかけた人々を巨大な根から守る。

「ロボット!!」

「助かったツ!!」

人々は歓声を挙げるが、当のマジンガーは焦っていた。

(こんなのが街全体に広がってるのだとしたら…何人犠牲になる!!?)

マジンガーは根を引きちぎり、そのまま別の根に乗りかかり、根の中心、樹木の方へ向かっていく。

(間に合ええええええええええええええええ!!!!)

根本を解決しにいく。この大混乱を招く事態に、いちいち助けに回ったらジリ貧だと判断したのだ。

しかし…

(!!…あれは…)

見覚えある顔が走っていた。

それは以前の事件であったアリサとすずかだった。

少女たちは後ろからくる根の大群から逃げていたのだ!!

(危ない!!ロケットパアアアアアアアアアンチツツツ!!!!)

噴射されるロケットパンチ。

それは走る根をいくつも引きちぎり、破壊していく。

「あ、あの腕は…」

「Zさん!!?」

二人もマジンガーに気がつき、その足を止めてしまう。

後ろから迫る根に気がつかず…

(危ねえええええええええ!!!)

マジンガーは超スピードで駆け出し、後ろの根に蹴りかかる。

その次に、ちょうど戻ってきたロケットパンチを根に叩き込み、

(光子力ビィィィィウムツツツ!!!)

光子力ビームで消滅させる。

これでしばらくは大丈夫だろう。

「あ、ありがとう!!」

「助かりました!」

二人は礼を言うが、マジンガーはそれを聞きつつ再び走り出す。

本当だったら二人を安全な場所に運びたいがそんな時間はなかったのだ。

根はさらに町を覆っているのだから。

┌ 《Z》 ─┘

結論から言えば、ジュエルシードは回収できた。

土壇場でのなのはの砲撃魔法が成功し、被害者は奇跡のゼロという結末を迎え、巨大な樹木は消滅した。

マジンガーには良い結末だったが、なのはは実はジュエルシードのありかは分かっていたらしい。

しかし、自身の油断が今回の事態を巻き起こしたことを深く思い悩んでいた。

「…………ごめんねユーノ君、ロボットさん…私がすっかりしてたら…」

「なのは…」

『…』

マジンガーにもその気持ちは痛いほどわかった。

過去にマジンガーの油断が人々の生活を崩してしまったことがあったからだ。

あの時町に戻っていたら

あの時調子に乗らなければ

あの時…人々の顔を思い出せたなら…

後悔は尽きない。人を助けるために生まれたスーパーロボットが人々を救えなかった。

それは事実であり消せない真実である。

(俺がかけられる言葉は…ない…)

マジンガーは夕日を見つめた。

ジュエルシードも、残りわずかとなっていた。

―《Z》―

深夜、町の中心にて、事故は起きた。

ジュエルシードを回収しようとした時、再び彼女が現れたのだ。

フェイト・テストアツサである。

彼女となのはジュエルシードを競い戦ったが、経験の差か、なのはは押し負けてしまふ。

そのとき、二人の魔法のぶつかり合いに反応したのか、ジュエルシードが暴走しよう

としていた。

二人がこのままではまずいと判断し、デバイスをジユエルシードに向け、封印しようとした瞬間……

バリーイイイインツツツ

なんと二人のデバイスがぶつかり、碎けてしまったのだ。

強制終了でデバイスは待機状態、残ったのはバリアジャケットのみの二人。

なのは方法が分からず戸惑ったその時、フェイトは迷わずジユエルシードを手で包み込んだ。

魔力による強制封印をしようとしたのだ。

しかし本来はデバイスを使つての行為、当然代償が存在する。

「くうツツツ……ああああ!!」

フェイトの小さな手から血が流れる。その顔を苦痛に歪ませ、叫ぶ。

それでも一向に力を緩めない。なんとしてでもジユエルシードを手に入れようとする執念を感じた。

しかし……彼が苦痛に耐える少女を見捨てるだろうか？

——否である。

勝負ごとならいざ知らず、すでにそれは勝負ではない。

「ツツツツ…あなたは…」

フェイトは近づいてきた大きな足跡に気づき顔を上げる。

そこには無機質な鉄の顔、マジンガーがいた。

マジンガーはそつとフェイトの腕を掴むとジュエルシードから手を引き剥がし、代わりにマジンガーがジュエルシードを握りこむ。

「な、何を…」

フェイトは驚きの声を上げる。

マジンガーはそのジュエルシードをつかんだ腕を空に掲げ

(ロケットパアアアアアアアアンチツツツツ!!!)

!!!!!!

なんとロケットパンチごと空へ打ち上げた!!!

「「「なツツツ!!!?」」」

その場にいた二人と二匹が驚愕する。

なぜそんなことをしたのかと問いただそうとアルフが声を上げようとするが、その前に…

(光子力ビィィィィウムツツツツツ!!!)

上空で光を発しているジュエルシールド入りのロケットパンチめがけて光子力ビームを加減なしに放った。

しばらく拮抗していた二つの光は徐々に弱まっていき、最終的にジュエルシールドの光は光子力の光に押し負け、包み込まれた。

しばらくして上からピクリとも動こなくなつたジュエルシールドだけが落ちてくる。どうやらロケットパンチは光子力ビームに耐えられず消えてしまったらしい。

超合金Zを消しとばす光子力の力に驚きが隠せない。

マジンガーは落ちてきたジュエルシードをつまむと、それをフェイトの手に落とし

「…いいの?」

『勝負ニ勝ツタノハ君ダ』

後ろでユーノが何か言ってるがマジンガーはそれをうまい具合に聞き逃す。(聞いてないだけ)

『次ハなのはガ勝ツ』

「私は…絶対負けない」

フェイトたちはそのまま退散して行つた。

あの目には、何かにすぎる思いが強く出ていることに気がついたマジンガーは、少し不安を抱いていた。

ー《Z》ー

デバイスが壊れて数日、自動修復していたようで、デバイスは完全復活していた。その頃マジンガーは…

「え?!腕壊れちゃったの!？」

コクリと首を揺らすマジンガー。それに対面しているのは、月村家の主人、月村忍だった。

『ドウニカナラナイダロウカ』

「といつても…腕の基盤くらいなら作れるけどあなたの装甲金属は流石に作れないし…」

当然である。なぜならこの世界には超合金Zどころか、元となるジャパニウム鉱石すらないのだ。作れたらそれは大変な事態だ。主にジジイにとつての。

(まあ当然だよな…邪魔ヲシタ』

「力になれなくてごめんなさいね…あ、でもちよつとした修理になら手を貸せると思うわ!その時はうちに来て」

『感謝スル』

マジンガーは月村家を出る。

その時、

「すずか…もう一度助けてもらったのね…ありがとう」

見送りにきた忍がそう言いながら微笑んだ。

(ああ…救えたよ。誰も欠けずに)

マジンガーは再びジュエルシード捜索に走り出す。

ー《Z》ー

「時空管理局執務官!クロノ・ハラオウンだ!!双方武器を納めてもらおう」
物語はさらに加速する。

ー…

二つ…

三つ
…
四つ
…
五つ
…
六つ
…

七つ
目の
…

マジンガー!空の決戦!!

管理局による介入から数日後、管理局はこのジュエルシードの回収、フエイト・テスタロッサの確保を管理局側に一任すると言い放った。

しかし、なのはは協力したいと願い、一時的な一般強力魔導師として作戦に参加することになった。

そして…

管理局時空戦艦 アースラ

デバイス格納庫

「これが君たちの街にいるのかい？」

「うん。ロボットさんだよ」

執務官、実質アースラで2番目の権力者とも言えるクロノと、なのはは目の前の魔神

を見上げる。

魔神は機能を一時停止し、その身を技術スタッフたちに預けていた。

以前、片手のない状態での戦闘を行った時、ジュエルシード暴走体からなのはを庇った時、大きくダメージを受けてしまい、ところどころガタが来ていたのだ。

そこで、協力してもらってる報酬として、メンテナンス、修理をアースラが請け負った。

「なのは、そういうえびさつきレイジングハートのメンテナンスが終わったとエイミーが言っていた。彼（マジンガー）は僕が見ておくから行ってくる」といい」

「あ、ありがとうなのクロノ君！」

なのはは慌てた様子で格納庫を出て行く。残されたのは技術員とマジンガー、そして強化ガラス越しのクロノだけだった。

（なのはやユーノは気づいてないらしい……このマジンガーの秘密に……）

クロノは一人後ろのモニターを見る。

（検査の結果、マジンガーはかなりの技術で骨組みから回路、関節部に至ってまで作られていて、その中心にあるエンジンは魔力とは違うエネルギーで動いている。だが……）

クロノはある一点を拡大する。頭部に設置してあるパイルダー、その中身、彼の脳で

ある。

(これはどう見ても…まさか地球では人間をロボットに組み替える非人道的な事が行われているのだろうか…だとしたら)

正義漢であるクロノは拳を握りしめる。

今、鉄の向こう側に押し込められた誰かの脳は、本当だったら人間としての時間を過ごしていたのかもしれない…という考えが頭をよぎる。

それは勘違いとはいえなくもない考えだった。

だが過ぎてしまったことに、過去には誰も干渉できないのだ。

ZEROにでも還らない限り…誰も…

—《Z》—

Zの手元には三つのジュエルシードがあった。

それは管理局に回収されることなく、マジンガー自身もその事態をすっかり忘れていた。

それが最後の戦いの架け橋になることを知らずに。

光子力エンジンにジュエルシードの光が灯る。マジンガーの機体に徐々に、徐々に変化が起きていた。

しかし、そんな事態に誰も気がつかず、ジュエルシードが残り数個となった時だった。アースラ局員となのはは町中くまなく探したが、それらしい反応は見つからず、残りは海に落ちたのではないのかという結論に終わった。

しかし、いざ海に回収に出かけようとした瞬間、

「あれは!!あの子です!もう一人の魔導師が海上に!…なにを…」

海の中に巨大な結界を張り、再びフェイトが現れた。

さらにそこから黄色い彼女も巨大な魔法陣が展開され、

『……………!!!』

「ま、まさか……ここらあたりに魔法を打ち込んで強制的に暴走させるつもりかッツッ!!!?」

その予想は的中した。もつとも的中して欲しくないことが……起きてしまった。

フェイトは巨大な魔法陣からいくつも魔法を展開し、海に叩きつける。

その瞬間、会場にいくつもの光が立ち上り、それらは水の竜巻をまとい、まるで龍のような形に変化していく。

フェイトは消耗した状態でそれらの封印に当たる。

┌ 《Z》 ─┐

そこはもはや異界であった。

立ち上る水龍に突然の気候の変化。フェイトの魔法が海上に走る。

フェイトは素早い旋回で、水龍を相手していく。

サポートでアルフが水龍の動きを止めるが、凄まじい力でバインドを粉碎、アルフを吹き飛ばし、そのままフェイトに向かって水の牙を突き出す。

「フェイトツツツツツ!!!」

「ツツツツ!!!」

一匹だけでも手一杯だったフェイトに、対応することはできなかったのだ!!

突如!水龍の背後が輝き出す…

(光子カビイイイイイイイイイイウウムツツツツツ!!!!!!)

そこには二人だけでジュエルシード暴走体の数体と戦うフェイト達を見つけた。

(マズイ!!このままじゃ…させるかああツツ!!光子力ビイイイイイイイウウ
ムツツツツツ!!!(!!))

後ろから迫る水龍に、光子力ビームを放つ。

光子力ビームを受けた水龍は元のジュエルシードに戻るが…

他の水龍がマジンガーを見る。

もともと暴走体に知性などない。それは本能にも近いものだった。

(アレは危険だ)

(アレは危険だ)

(ならどうする?)

(ならどうする?)

(——殺す。殺す。奴を殺す)

((((殺すツツツツ!!!!喰い殺せ!!!!))((

水龍はフェイトとアルフには目を向けず、マジンガーにその牙を?き出し突っ込んでくる。

(なにツツツツ!!?)

煙が晴れた瞬間、元の大きさに戻った数匹の水流が現れ、マジンガーを飲み込む!!

水の中で弄ばれ、振り回される。

やがて奴らのホームグラウンド、水中に引きづりこまれた。

(す、水中は…!!)

ただでさえ重いマジンガーは、さらに身動きが取れなくなる水中での戦闘は不得手だったのだ!

水中でもその形を失わないのは魔法なのか、古代力なのか、その牙をあらゆる方向から切りつけてくる。

うまく動けないマジンガーの体を牙がどんどん傷つけて行き、超合金乙は抉っていき、切り割かれていく。

(クソ…う、動けない…うおお!!?)

足に噛み付かれ、そのまま海上に引き上げられる。

(な、なにを…)

その映像はアースラにもしつかり届いていた。

一 《Z》 一

「ロボットさんが!!…あんなに…傷ついて…」

「クロノ!!まだ出るなっていうの!?!もうこのままじやロボットが死んじゃうよ!?!」

アースラ内、モニターを見ていたなのはとユーノは、マジンガーの有様を見て、いてもたってもいられず、クロノの呼びかける。

「…艦長…」

「…ええ。事態はフェイト・テストロツサの確保ではなくなったわ。なのはさん。ユーノ君。出撃を許可します!!」

「あ、ありがとうございますリンディさん!!」

「行くよなのは!!」

なのはとユーノは転送ポートへ走っていく。

残されたのは、局員達とクロノ執務官、そして艦長であるリンディ。

「クロノ執務官。あなたも彼らのサポートを。」

「わかりました…なのは達に伝えなくていいんですか?」

それはマジンガーがもともと人間だった可能性だ。

クロノ自身、あまりこれ以上彼を巻き込みたくない思いがあったのだ。

「…まだです。今伝えれば混乱を招く恐れがあります」

「わかりました。エイミイ！オペレートは任せました！」

「了解！頑張つてね」

クロノも急ぎ転送ポートへ走っていった。

ー《Z》ー

ガシヤアアアンツツツ

海岸の壁にマジンガーは叩きつけられた。

しかしそれでも、ギギギという音を立ててまだ立ち上がろうとする。

(まだ…戦え…る筈だ…!!)

先程から何度も海面に叩きつけられ、牙による、攻撃で、身体中から火花を鳴らし、す

でに足は千切れていたのだ。

すでに立ち上がれない。

それでも魔神の目は敵を見ていたのだ!!

(…動け…Z…俺たちは…まだ戦えるだろ?俺たちは…お前は…)

——ギギギ…

(お前は…人類が作った…)

——ガギギギギギギツ……

(最強のスーパーロボットなんだからツツツツツ
!!!!!!!)

!!!!!!
)

今日、
魔神は空を駆ける。

『光子力ビーム』

突如空から何千もの光の雷が海に降り注ぐ。

「きやあツツツ!!?!」

「クツツ…なのは…!!」

ユーノはなのはのそばにより、光から遠ざかる。

しかし、不自然なほど光はなのははやフェイト達を避けて走つてるようにも見えた。

しかし…光の威力は凄まじく、海を割り、海底を削り、地中にまで光は走つていく。

地球の裏側にまで届きそうなほどである。

当然巨大な水龍達は避けられず、光に直撃する。

蒸発し、残ったのはジュエルシードらしき光だけである。

それだけでもジュエルシードの頑丈さは地球以上だとわかる。

「す、すごい、一気に数が減って…あ!ユーノくん!クロノくん!あれ!!」

「!!」

なのはは上空を指差す。それにつられ、上に顔を向け、フェイト達もなのはの声が聞こえたのか、上空に目を向ける…

そこには…

——ギギギギギギギ…

オオオ

オオオオ…

!!!!

背丈大きさ…見た目が少し違うが、間違いない。

黒い体、白い四肢。黄色い光子の光を掲げ、紅い翼で天空に立つその姿は…

間違いない。

マジンガーZである。

高熱板も以前ののような四角い鉄板のような形ではなく、まるでコウモリの翼のような、いや、それはまるで悪魔の翼だった。

放出されたブレストファイヤーも、以前のより遥かに威力、射程が上がった熱線が残った全ての水龍を消しとばす。

それだけに止まらず、そのまま熱線は上空に展開してある結界をまるで濡れたティッシュを破くように簡単に破壊する。

「嘘……あんな簡単に……」

結界が徐々に崩れ始める。空や海が元の色を取り戻し始める。

しばらくすると上空からマジンガーが海上すれすれに降り立つ。

その背には今までにはない、鋼の翼がそびえていた。

紅く、刺々しいその翼により、魔神は飛行を可能としていたのだ。

「……ロボットさん……?」

なのはは正直なところ、危機感というか、恐怖を感じていた。

以前より黒い部分は盛り上がり、無機質なのにまるで生きてるかのようになり、筋肉質に膨れ上がっていた。

白い部分には黒い線が走り、それに合わせ、盛り上がっている。

そして、なのは達が最も異様に感じたのがその顔である。

以前までの無表情のような顔ではなくなっていた。

口は開き、鉄格子のような口は牙のようになり、横に裂けている。

横に伸びていた黄色のツノは、より鋭く伸びている。

目はギラリと絞り込まれ、気のせいか中心に機械にあるはずのない目があるように見えた。

じつと見ているとなのはの視線に気づいたのか、黒目をなのはに向け、体もそちらに向け。

『……………』

「……あ……ろ、ロボット……さん？」

静寂が場を支配していたその時!!

後ろから突如巨大な魔方阵が展開し、そこからは達に強烈な雷が走る!!!!

バアアツツツツ!!!

しかし同時のマジンガーは振り返り雷を腕で弾きながらなのは達の前に出る!!

しかし…

「フエイトおおおおお??」

「!!?!」

アルフの叫びが響き、そちらの振り向くとそこには魔方阵を見て呆然とするフエイト

がいた。

まるでその魔法を知っているかのような…

「か、母さん?」

雷がフェイトにも迫る…しかし…

『光子…力…ドケ!!俺ガヤル!!』

マジンガーがなんとフェイトごと光子力ビームで雷を弾こうとするが、マジンガーの中で何か変化が起きる。

(どけつつつてんだ!!!光子力ビイイイイイウウムツツツツ!!!)

一瞬マジンガーの様子がおかしくなったが、すぐにフェイトの元に飛び込み、雷を光子力ビームで相殺する!!

しかし、それは罠だったのか、フェイトが所持していたジュエルシールドのみが雷に奪われ、魔方阵の奥に引きづりこまれる。

「ど、どうして…」

フェイトはそう眩くとそのまま落下していく。

(まずい!!ジエツトスクランダアアアアア!!)

落下するフェイトより早く落下地点に移動し、優しく抱きとめる。

「フェイトオオオオオオオオ!!!!だ、大丈夫かい?!?フェイト!?!」

アリフが何度もフェイトに呼びかけるが、うなされてるのか、体を震わせ、息が荒かった。

「フェイトちゃん…」

「とにかくアースラに戻ろう。あれほどの魔法だ。発信源は捕らえられる。

…彼女も保護しよう」

クロノに連れられ、アルフとフェイトはアースラに移動する。

どこかアリフは誰かに怒りを抱いてるようだった。

物語の終局まで…あと数刻。